

塩尻和子著『イスラーム文明とは何か——現代科学技術と文化の礎』
(明石書店、2021年)

岩崎真紀

本書は中東・イスラーム研究者である塩尻和子氏による、イスラーム文明に関する一般読者向けの概説書である。本書の内容は、著者がNHK文化センターで2014年度と2018年度にイスラーム文明をテーマに連続講座を担当した際の講義録に、加筆編集したものである。

本書の構成はつぎのとおりである。

はじめに、序章、第1章 イスラームとは何か、第2章 ギリシア科学の受容、第3章 ギリシア文明の継承と発展——大翻訳事業、第4章 イスラームのイベリア半島征服とヨーロッパへの伝播、第5章 商業活動の発展と航海技術、第6章 エレガンスと生活文化、第7章 錬金術、数学、天文学、第8章 医学者と哲学者、第9章 西洋中世哲学への影響、第10章 イスラーム芸術の世界——アラベスクと建築、第11章 十字軍の歴史とレコンキスタ、第12章 西洋の発展——脱イスラーム文明、第13章 イスラーム文明・近代文明の源流としての意義、アラビア語から英語に入った単語、本書で参照・参考にした文献。

著者によれば「イスラーム文明」とは、「7世紀から17世紀にかけて、当時の世界で最も知的完成度が高く、今日の人類が日々の暮らしの中で、意識的にであれ無意識的にであれ縦横に享受している現代文明の礎を確立した文明」(13頁、下線引用者)である。このように、著者はイスラーム文明を過去の遺産としてとらえるのではなく、現代社会に生きるわれわれとも深いつながりがある「現代文明の礎」としてとらえている。イスラームに関する概説書は日本でも多数刊行されているが、こうした観点から論じたものは少なく、そこに本書の独自性がある。

中世イスラーム世界における科学の発展についてイスラーム研究者が論じた代表的な概説書には、つぎのようなものが挙げられる。嶋田襄平編『東西文明の交流3 イスラム帝国の遺産』(平凡社、1970年)、佐藤次高編『岩波講座 世界歴史10 イスラーム世界の発展』(岩波書店、1999年)、佐藤次高・鈴木董編『都市の文明イスラーム』(講談社、1993年)、後藤明『ビジュアル版イスラーム歴史物語』(講談社、2001年)、小杉泰『イスラーム 文明と国家の形成』(京都大学出版会、

2011年)。しかし、これら文献はいずれも中世イスラーム世界の科学の発展についての詳述はあるものの、そのヨーロッパへの伝播についてまではあまり踏み込んでいない。また、本書で論じられているような食文化やファッションなどに対してはほとんど言及がない。

本書のもう1つの独自性は、中世イスラーム世界内部におけるムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒のつながりについて紙面の多くを割いている点である。類似したテーマを持つ概説書には、NHK「文明の道」プロジェクト（清水和裕ほか）『NHK スペシャル文明の道4 イスラームと十字軍』（NHK出版、2004年）、太田敬子『ジハードの町タルスース——イスラーム世界とキリスト教世界の狭間』（刀水書房、2009年）、同『十字軍と地中海世界』（山川出版社、2011年）がある。しかし、これら文献は中世におけるイスラーム世界とキリスト教世界の交流について論じたものであり、本書のようにイスラーム世界内部の宗教共存に焦点をあてているわけではない。そうしたテーマで書かれた数少ない文献としては、田村愛理『世界史のなかのマイノリティ』（山川出版社、1997年）がある。イスラーム文明圏を「多元的共存社会」ととらえ、中世におけるイスラーム共同体とユダヤ人とアルメニア人の各ディアスポラ（同書の用語では「交易離散共同体」）の関係を歴史学の観点から詳細に論じている。リブレットであるため分量は少ないながら大変興味深い内容である同書は、本書『イスラーム文明とは何か』に描かれたイスラーム文明下のユダヤ教徒やキリスト教徒のより細かな状況を知るうえで参考となるだろう。

本書の著者である塩尻氏の専門は中世イスラーム神学だが、長年にわたりイスラームと他宗教の共存や宗教間対話についての研究もつづけてきた。さらに実践者としてもさまざまな活動に携わっている。具体的には、国連グローバルセミナー、ドーハ国際宗教間対話会議、日本とイスラーム世界の未来対話（日本国外務省主催）、世界宗教者平和会議、カイロ大学をはじめとする中東や北米の大学での講演会などに日本の宗教学者を代表してゲストスピーカーや司会者として参加してきた。本書の内容は著者のこうした深く、幅広い経験にもとづいている。

本書ではイスラーム文明が生み出したものとして、固形石鹼（91頁）、代数学（93頁）、火薬、天文表、天球儀（いずれも15頁）などが挙げられる。アッバース朝時代（749-1258）に活躍した医学者であるラーズィー（864-925または932、ラテン名ラーゼス）やイブン・スィーナ（980-1037、ラテン名アヴィセンナ）が著した医学書は、16-17世紀までのヨーロッパの医学の発展に大きく寄与した（105-110頁）。後ウマイヤ朝（756-1031）を代表する音楽家ズィルヤーブ（789頃-845頃）がアラブからイスラーム支配下のスペインへもたらした、スूप、メイン、

デザートという料理の配膳順はのちにフランス料理に継承され、今日のようなテーブルマナーが生まれた（79 頁）。本書はこうしたことを豊富な写真や画像、そして具体例とともに、実に鮮やかに描き出す。

イスラーム文明はギリシア、エジプト、メソポタミア、インドなどの先進文明を取り入れ、それらを融合・発展させ、さらに高度なイスラーム科学を生み出した。そして、それは同時に、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、サービア教徒、アラブ人、ペルシア人、トルコ人など、宗教や民族の異なる人々の共同作業の成果であったことを、本書は丹念に論じる。

本稿を執筆中の 2021 年 8 月、アフガニスタンでは再び武装宗教政治集団ターリバーンが政権を奪取した。これにより世界では再びイスラームを「特殊」で「不寛容」な存在とみなす主張が目立つようになってきた。しかし、こうしたときだからこそ、文化や民族、宗教の共存と融合のもと発展したイスラーム文明の功績に目を向けた本書の重要性は、さらに増していくだろう。